



(三枝朝四郎氏撮影)

足利さんを想う

羽 田 明

昨年の晩秋、足利さんが鬼籍に入られてから、早くも1年になろうとしている。51年（1976）に病に倒れられて以後数年間の御療養中には、ついに御病床をお見舞いすることもなく、折々に人伝てに御病状を承るだけに終わった。傷々しいお姿を見るだけの勇気がなかったせいで、今更ながら慚愧に堪えない。

公の席上ではともかくも、その御生前、私はついに「足利さん」以外の呼び方をしたことがなかった。受業の師以外には先生という敬称を使うべきではないという先考の庭訓に忠実だった訳ではない。私なりに、親しみを籠めて「さん」づけで呼ぶ理由があったからである。

私のはじめて足利さんの名を知り、その人となりや暮しぶりの一端を耳にしたのは今から既に40余年前の三高在学中（昭2-5）のことであった。同志社大学の英文学科を卒業された足利さんが、榊亮三郎教授の薫陶を受けて梵語・梵文学の研究を積み、兼てイラン学に手を染め始められた頃のことである。

足利さんが東京を去って京都へ移られ、榊教授に師事されるに至った間の事情とか、南禅寺附近の豆腐屋の隣家（？）に下宿しておられた足利さんがヴェーダだったか、アヴェスタだったかの1頁を1日で読めるようになったとあって喜ばれたとか、そういう種類の話をして私の関心を唆ったのは今も交際の絶えない級友のH君であった。H君の長兄は、同志社大学在学中に足利さんと親しくなり、その関係から足利さんの消息に詳しくだったのである。

昭和5年、私が東大の文学部東洋史学科に進んだ年に京大文学部の講師に就任された足利さんのその後の経歴や業績、特に日本におけるイラン学の先達として果された役割については足利惇氏教授退官記念号である本誌13号（1964）に、織田武雄教授が簡潔に要点を述べられている。私も『京大広報』245号（1982）の〈随想〉に、京大文学部

足利さんを想う(羽田)

における西南アジア研究の芽ばえから始めて、西南アジア研究会の成立(1956, 昭31)、その機関誌としての『西南アジア研究』の創刊(翌1957)、史学科での西南アジア・コースの新設(同年)を経て西南アジア史講座の誕生(1970, 昭45)に至る経緯を誌し、足利さんの配慮・支援に謝意を表したことがある。西南アジア・コースの時代には、足利さんはその構想に参画されたばかりでなく、宮崎教授と共に、進んで難しい西南アジア史の概説を引受けて下さった。

一方、つとに現地調査の必要を痛感されていた足利さんの御盡力で、西南アジア研究会の探検隊がイランへ派遣されたのは本誌の創刊に先立つが、1959年(昭34)以来は、京都大学のイラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊(いわゆるIAPA)の委員会委員——実質的には委員長——として連年調査隊の派遣に盡力されたばかりでなく、退官の前年(1964, 昭39)には田村教授と同道して曾遊の地イランを自ら踏査された。私が始めて西南アジアの土を踏み、その後の研究に確かな手がかりを掴むことができたのも、1959年(昭34)の第1回調査隊の一員としてのことであつた。

京大を退かれたのち、東海大学に移られ、学部長から学長の重任に就かれたのちの足利さんには、その常務理事ついで会長を勤められたオリエント学会の会合で毎年何度かお会いした。また、その間、偶然とはいえ、渡仏途中の私は、1971年(昭46)、ペルシア帝国2500年記念行事に招待されて、三笠宮に随行された足利さんとテヘランの日本大使公邸でのレセプションでお目にかかった時の印象が今も鮮明である。それはIAPAの古参仲間と通用していた俗称「將軍」の悠揚迫らざる風格であつた。

京大で、梵語・梵文学の秀れた後継者を育てられ、イラン学の根底を築かれた足利さんの学問的功績は誠に大きい。そればかりではなく、西南アジア研究会やオリエント学会の活動を通じて、本誌の創刊号に自から述べられた抱負の実現に努められた結果には驚嘆すべきものがある。第2次大戦時まで、この分野では確かに世界の後進国であつた日本に西南アジア研究の気運が澎湃として興り、今日の隆盛を見るに至った事実のうちに、私は足利さんの強い影響を認める。足利さんが意図されたように、西南アジア研究会が人文・社会・自然の諸科学の若い研究者たちの同志的組織として発展し、それらの人々の研究成果で『西南アジア研究』の誌面を飾ることができるように私は切に祈る。これこそ終始足利さんのお世話になってきた私たちのできる唯一の御恩返しであろう。

運営の不幸から、10余年にわたって杜絶えていた『西南アジア研究』23号の続刊を喜び、足利さんの遺志に従つてその資金を本会に提供された同夫人の御厚意に深甚な謝意を表する。

昭和59年9月2日